

読書

11 読書 12版 1996年(平成8年)3月3日 日曜日

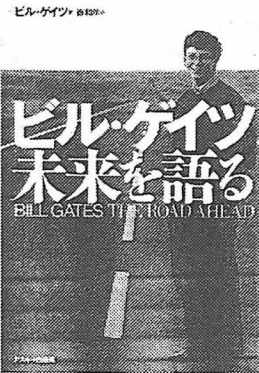
11 読書 12版 1996年(平成8年)3月3日 日曜日

ウィンドウズ95発売の狂騒劇、マルチメディア時代到来のかけ声もやかましいなか、マイクロソフト社の創業者ビル・ゲイツ氏が、初めての著書を出版した。新興ベンチャー企業の活力が本書にみまぎっている。

当年四十歳の氏は、MS-DOSやウィンドウズといったコンピュータソフトの成功で、いまや世界一の大富豪だ。高校でコンピュータに熱中した十七歳の思い出から、激烈な企業競争を勝ち抜いた日々、情報ハイウエイが駆けめぐる未来社会の展望まで、どのページからも、脈々とした躍動が伝わってくる。

ビル・ゲイツ 未来を語る

ビル・ゲイツ著



（西和彦訳、アスキー・1,800円）
12月12日発売。2月27日トーハン調べで<ビジネス書>部門6位。40万部。読者の中心は20代-50代ぐらいのビジネスマン。「ビル・ゲイツについて書かれた本はたくさんあるが、本人が書いた本はこれが初めてということに関心を集めている」と版元。

アメリカの底力示す本

だがゲイツ氏は、時代はる。同時に大きなビジネスチャンスも開けるだろう。エー期に移りつつあると言通信ビデオ、電子マネー、電子出版、ビデオ会議…。管理職の仕事はなくなる一方、都市から農村に移り住む人ひとも多くなる。一時は失業も出るが、長い目でみれば人びとの生活は向上していく。新たな雇用も生まれるはずと、ゲイツ氏の予測は楽観的だ。

「世界で最高の仕事をしていると公言してきたけれど、ほんとうにそう思っている」と語るゲイツ氏のたくましさ。先端の研究者が激烈な競争の火花を散らすアメリカの底力はあなどれない。オウムや住専のぬかみに足をとられているわが国は、まただいぶ水をあげられてしまった。

ベストセラー診断

橋爪 大三郎(社会学者)

本書の前半、コンピューターなるのなら、死命を制するター業界栄枯盛衰の戦国史がまず、手に汗を握る面白さだ。チップの性能は二年で倍々に向上すると予想された(ムーアの法則)。計この戦略の正しさは、同社算コストがどこまでも安くの成功が証明している。

だがゲイツ氏は、時代はる。同時に大きなビジネスチャンスも開けるだろう。エー期に移りつつあると言通信ビデオ、電子マネー、電子出版、ビデオ会議…。管理職の仕事はなくなる一方、都市から農村に移り住む人ひとも多くなる。一時は失業も出るが、長い目でみれば人びとの生活は向上していく。新たな雇用も生まれるはずと、ゲイツ氏の予測は楽観的だ。

11 読書 12版 1996年(平成8年)5月5日 日曜日

読書

橋爪 大三郎

売れてる秘密

中年男性向け雑誌「自由時間」に、一年あまりにわたって連載されたインタビュウの集成。折からのオウム・サリン事件、阪神大震災を柱に、憲法問題、いじめ問題、大江文学から円高まで、戦後五十年の日本を取り巻く問題群を、吉本氏一流の視角から自在に論じる。聴き手は三上治氏。

戦後日本を代表する思想家・吉本氏と三上氏の組み合わせは、どこかラ・マンチャの男とサンチョ・パンサを思わせる。

日本経済が絶好調だった一九八〇年代、吉本氏はマス・イシュー論、ハイ・イシュー論で時代を解明してみせた。十年後の本書も、相変わらず手慣れた運びだが、微妙な留保が付されて

『世紀末ニュースを解読する』

吉本 隆明著



（マガジンハウス・237円・1,600円）
3月21日発行。2刷2万8000部。94年から雑誌「自由時間」に連載された。時事問題が詳しい、詳細な脚注がついていることから、就職試験用に買う学生も多いという。

ためらいに時代の動き

いる個所が気になった。たとえば安保条約。《自分の中で最終的な結論は出ていません》とためらいながら、相手国の兵器が半減したら△アメリカ軍の兵力や基地も半減するという要求《はできるはず、とのべる。ロシアの軍縮をにらんでの議論だが、この論法だと、相手が軍拡に転じたら今度はアメリカ軍の増強を要求しなければならなくなる。それでよいのか。麻原教祖については《なぜ無差別に無関係な人を殺傷する行為をしたのか》疑問が残ると留保しつつも、あとは《すべて解明しているつもり》という。でも、彼の宗教思想が犯罪に結びつく必然性を解かないと、事件の急所を押さえたと言えないのではないか。

これまで吉本氏は、文学者と思家家の二役で、冷戦下・日本の言論をリードしてきた。資本主義/社会主義の硬直した対立の構図をゆるがすところに、氏の本領があった。だが、そうした構図は解体し、現実が思想と呼応して動き始めた。思想はこれまで以上に、具体的な解決策を示すことを求められるようになった。いくつかの留保は、動き出した現実と吉本思想との「誤差」を、氏が書きこめたものとも見える。多々の読者も、そうした微細な言い回しから、時代の動きを読み取りたいのだろう。

(社会学者)

読書

売れてる秘密

橋爪 大三郎

侵略が進出か。日本の近代史は《ことごとく悪》だったのか。歴史と教科書につきまとうモヤモヤを、すっきりさせたいという果敢な試みである。

小中学生でも理解できるようにとある通り、読みやすい。産経新聞に連載中のコラム、七十八回分が収められている。筆者は現役の小学校教師や大学の教員たち。藤岡信勝氏ら自由主義史観研究会のメンバーだ。

歴史は、ひからびた過去の出来事の羅列ではない。さし迫った現在の連続、その時を必死に生きた人びとの決断と行動の積み重ねである。——そんな当たり前のことを、本書は気づかせてくれる。

本書の特徴は、戦後の歴

『教科書が教えない歴史』

藤岡信勝・自由主義史観研究会著



(産経新聞ニュースサービス発行・1,400円) 8月1日発売。9刷20万部。全4巻の第2巻を発売する。小学・中学生が読めるが、店頭では中高年層を中心に売れている。

複眼的だが、先まだ遠く……

史教育や大東亜戦争肯定論のような一方的な善玉・悪玉史観でなしに、複眼的なものの方を強調する点。台湾や朝鮮で現地につくした人びと、アジアの独立を支援した日本人たちを紹介する。そして日本人が《日本の国益に立って》ものを考えるのは当然」としうえ、他国にもその権利を認め、当時の国際社会の力学とを柳瀬潮事件を、現場

のなかで日本の選択を再認識しようとする。 こういう試みもあって、いざ、これでは国ごとに違った歴史ができてしまい、その溝を埋められなくなるのではないかと心配だ。 先月中国北部を回り、七三一部隊の跡、盧溝橋、柳条湖、平頂山虐殺現場ほかを見学してきた。本書はた

行く先々で中国の人びとは、日本の歴史認識を非難した。日本人が読む必要があるのは、むしろ彼らの歴史の教科書かもしれない。 われわれが率直に歴史を見つめるためには、健全なナショナルリズムが必要だ。 本書はそのための一歩である。だがまだ先は遠く、方向もこれで正しいのか疑問である。(社会学者)

読書

売れてる秘密

橋爪 大三郎

約四百万部という驚異的な売り上げの『脳内革命』の続編。これも百三十万部に迫る勢いがある。

前著と同じく本書でも、著者・春山茂雄氏(田園都市厚生病院院長)は、西洋医学と東洋医学を結合した医療の理想を熱く語る。いわく、プラシタチンを実践して脳内ホルモンを分泌させよう。免疫力を高め、健康と長寿を手に入れよう。人間はだれでも百二十五歳まで生きられるのだ、と。

日本は豊かになった。結核や伝染病に代わり、糖尿病やがん、心臓病など慢性の病を抱えた患者が主流になった。病院で治療を受けても劇的な効果は望めない。薬づけ、検査づくで医療費もかさばるばかり。これ

『脳内革命②』

春山 茂雄著



(サンマーク出版・1,600円) 9月28日発売。17刷125万部。昨年6月に発売され107刷390万部のミリオンセラーとなった『脳内革命』の続編。「平成最大のベストセラー」で、雑誌など関連商品も多い。

売れる健康法、めでたし?

中高年への福音である。病気を治すのは西洋医学ではなく、自然治癒力だ。それを促進するのが脳内ホルモンのこと。薬に頼らなくても、あなたの気持ち次第で健康が戻るのだ。

『脳内革命』の成功で、著者は一躍時代の寵児(ちようじ)となった。そのせいか、控えめだった前著に比べ、今回は根拠のない非科学的な断定が目立つ。たとえば、左脳・右脳論。左脳が理性や感情をつかさどるのに対し、右脳には先祖の知恵が遺伝子情報として蓄えられていて、瞑想(めいそう)すれば取り出すことができる、という。コメントしようもない珍説である。 こういう独断があちこちに交じるもの、本書は要するに、よくある健康法の集成だ。読者がこれを読んでも、食事に注意し、リラックして規則正しい生活を送るのなら、それでめでたしなのかもしれない。 にもかかわらず本書を有害だと思うのは、カリスマ的な著者の独断がひとり歩きして、ふつうの人びとが医学の助けを求めると同時に、医学の進歩を恐るのでは、と恐れるからだ。著者はあくまで善意で、脳内革命を唱えているのだから。しかし、科学的根拠のない「仮説」を真理と説いてしまうと、本書は、オウムと同様の危険な一線を越えつつあるのである。(社会学者)

読書

1996年(平成8年)7月28日 日曜日 享月 日 業斤 屋頁

売れてる秘密

橋爪 大三郎

天安門事件前後、CIAの陰謀に立ち向かう日本のヒーロー・富島新五。大学に進学せず世界を遍歴し、商社を設立、社長を務めるかたわら、裏では国際情報ビジネスを営む。公安筋やマフィアのボス、人民解放軍参謀と、世界中に人脉を張りめぐらしている。

対するは、アントニオ・ガルシアノ。グアテマラの貧民街からアメリカに留学、優秀な特務工作員となった男だ。いまは、CIAが表に出られない対中国工作を、一括「パッケージ」で請け負う大物である。

息のかかった留学生や武器を送り込み、民主化に油を注いで中国の解体をはかるアメリカの策謀を知った富島は、首相の意を受けて



(集英社・上下各1,400円)

6月18日発売。上巻3刷7万2000部、下巻6万7000部。20歳代のサラリーマンが約8割。時まつ男性読者が織り込まれ、国際ビジネスとして読まれている。

学、独力で国際ジャーナリストへの道歩んだ落合氏は、ひ弱な日本のリーダーにいら立っている。情報の価値を理解せず、決断できず、国際的な視野からものを考えられない。指摘はいいちもった。

実体験を踏まえているぶん、落合氏の文章にはパワーがある。ただし本書に限れば、人物や設定がワンパターンすぎる。せつかく舞台が中国なのに、中国のおいがない。民主化を支持する人びとの顔も見えない。現場に飛びこむものもい。地道な背景分析を踏まえれば厚みも増すのに、思った。(社会学者)

『烈炎に舞う』

落合 信彦著

行動を開始する。マフィア壁や面倒な手続きを乗り越えに手配し、香港のCIAエージェントを次々暗殺。アントニオもこれに応戦、壮絶な戦いの中から二人に友情が芽生えるのだ。

これは劇画だな、と私は思った。

登場するのは、成績抜群のエリートやずば抜けた特技の持ち主ばかり。彼らは著者の分身とも言える人物。苦労してアメリカに留

壁や面倒な手続きを乗り越えに手配し、香港のCIAエージェントを次々暗殺。アントニオもこれに応戦、壮絶な戦いの中から二人に友情が芽生えるのだ。

これは劇画だな、と私は思った。

登場するのは、成績抜群のエリートやずば抜けた特技の持ち主ばかり。彼らは著者の分身とも言える人物。苦労してアメリカに留

夢ある新入社員向け劇画

橋爪 大三郎

日本は無条件降伏しなかった。本土決戦で大半が戦死、連合国に分割占領されながらも、地下トンネルを掘って戦い続けた。それを取材し、CNNの女性記者が単身潜入するところから、物語が始まる。



(幻冬舎・237頁・1,500円)

4月25日発売。10万部の続編。読者は、30歳代後半までの女性が多く、現状の日本への批判的な視点に共感する人が多いという。3作目も執筆予定。

基地の町のけだるいセックスと麻薬の日常が、とめどない暴力と破壊への衝動に置きかわっていることだ。

兵士たちは、あくまでも規律正しい。しかし、彼らは任務を果たしたのか。本書はUG兵士がヒュウガ

1996年(平成8年)6月23日 日曜日

享月 日 業斤 屋頁

読書

売れてる秘密

歴史のイフ。枝分かれの向こうのもうひとつの世界は五分間だけ時間がずれている。日本国軍・UG(アンダーグラウンド)の兵士たちを描いた前作『五分後の世界』の続編である。

今回も戦闘シーンは、ランボーか地獄の黙示録さながらに勇ましい。ロケット弾がうなり、人肉が焼け、はらわたがとび散る。兵士たちの任務は、突如現れた奇病ヒュウガ・ウイルスの感染源、ヒュウガ村を全滅

『ヒュウガ・ウイルス』

村上 龍著

させることだ。だがこのウイルスは、エボラ熱とエイズと、ペストを合わせたように凶暴で、ついに女性記者も感染してしまう。

この小説は、人間を描くことを徹底的に放棄している。国軍兵士は、必要なことを簡潔に口にするだけの戦闘マシン。混血の準国民はスラムにたむろする犯罪者、原日本人は文化もない

動物のごとき存在だ。身体を吹きとばされ奇病に侵され死んでいく彼らを、作者は外側から眺めるだけだ。

「五分後の世界」は、植民地のように卑屈にアメリカに従属する戦後日本の象徴だろう。要するに、村上氏はデビュー作『限りなく透明に近いブルー』と同じテーマを、この連作で描いている。違っているのは、

村を焼き払ったかどうかという女性記者の手紙で結ばれる。UGの究極の敵はアメリカだというのに、頼まれればどんな任務にもつく。戦術はあるが戦略がない。彼らもわれわれ同様、規範を見失った日本人なのだ。彼らが戦った目にみえないウイルスは、自分をむしばむ虚無感だったのでは。(社会学者)

戦後日本象徴する黙示録